

パウルス教会とニコライ教会—国のかたちの在り方

獨協大学法学部 小野 秀誠

フランクフルトのパウルス教会は、町の中心部のローマ人広場に近く、現在では観光資源となっている。歴史的には、1848年の三月革命の後、統一ドイツの国民議会の会場となったことで知られている。三月革命は、ナポレオン没落後の1815年のウィーン会議により成立したメッテルニヒの復古体制を終わらせた。革命後の自由主義的な国民運動は、ドイツ統一を目ざし、1849年に民主主義的な憲法を可決したが（パウルス教会憲法）、プロイセン国王が、国民主権にもとづく帝冠を拒絶したことから、統一事業は挫折した。ビスマルクによる統一が完成したのは、ようやく1871年であった。統一の先駆けとなったフランクフルトのパウルス教会の入口には、「最初のドイツの議会」(Erstes deutsches Parlament)との金属版がはめられている。

教会が、再度現代史に登場するのは、約1世紀後である。この時の舞台は、ライプツヒのニコライ教会である。1989年5月に、ハンガリー、オーストリアの国境が開放された（ハンガリーを経由する市民の流出）が、東ドイツのホーネッカー政権は、いまだに東西の国境に固執し、政権の維持を図った。その直前の東ドイツの地方選挙（5月7日）では、政権による選挙結果の改竄も行われた。これに対し、パウルス教会に集まった市民が月曜デモ（Montagsdemonstration）を敢行し、反対意思を明らかにした。デモは、6月から散発的に行われていたが、決定的だったのは、10月9日のものであった。7万人が参加したといわれる。この影響は全国に広がり、10月18日には、1971年から続いたホーネッカー政権は倒れ、11月9日に、ベルリンの壁は崩壊した。翌1990年10月3日に、東ドイツの5州が連邦共和国（西ドイツ）に加入し、東西ドイツは再統一された。月曜デモは、再統一への重大な契機となったのである。上述のフランクフルトのパウルス教会でも、この経緯について詳しい展示が行われている（日本語の音声ガイドもある）。

ライプツヒは、ザクセンの主要都市であり、ライヒ大審院があった土地として知られている。ドイツ統一前に、ザクセンは、南ドイツとともに、プロイセンに対する抵抗勢力であった。統一後、ライヒ大審院は、行政府やライヒ議会のおかれたベルリンなど北ドイツとの均衡から、ライプツヒにおかれたのである。

東西の教会が、時代を先取りして、時の復古的勢力と対立する舞台となったことは興味深い。パウルス教会の舞台は、ドイツ統一の先駆となり、ニコライ教会の舞台は、再統一の先駆けとなった。

最近、フランクフルトのパウルス教会の前には、Grenzen überwinden（境界を克服する）の像が置かれている。「境界の克服」は、何の先駆けとなるのであろうか。EUによる国境の開放は、1985年（1990年補足）のシェンゲン協定の後、新たな加盟国をえて拡大したが、昨今の難民の増加により、国境管理は、むしろ強化される方向にある。しかし、ステレオタイプの国民国家は、もはや時代にそぐわない。新たな国家や国際秩序が問われている。